

第30回 郷土先賢室顕彰者紹介



富山県美容界の母

たなか
田中 きみ (1901~1991)

田中きみは、明治34年（1901）11月3日、津田源作とかのの長女として、西礪波郡若林村（現 小矢部市）に生まれた。18人が同居する家をきりもりする母を見て育ったきみは、「母を楽にさせてあげたい」と願うようになった。

大正6年（1917）、きみは15歳で富山市内にあった柴田髪結店へ修業に入った。人一倍熱心に働き、1年もすると一通りの仕事をこなすようになった。そして大正7年（1918）7月、16歳で独立し、花柳界でトップクラスの芸者が集まる高岡市桐木町（御旅屋）に髪結店を開業した。当時の髪結は、顧客の自宅等で髪を結うのが主流であったが、きみは自宅の1階に鏡と椅子を置き、顧客に訪れてもらうという今の美容院の形を取り入れていた。「美しく仕上げ、気持ちよく帰ってもらうこと」を心がけて働いたきみの仕事振りは、早く丁寧だと評判になり、多くの芸者がひいきにしてくれるようになった。大正8年（1919）、17歳で紋付絵師の田中直次郎と結婚し、その後3男1女に恵まれた。

流行に敏感な芸者衆を相手にするきみは、店の休みに、日本の美容界の草分け的な存在だった山野愛子が経営する東京の美容室（山野美粧院）へも通った。山野のパーマネントの技術を見よう見まねで学んだきみは、昭和13年（1938）、富山県で初めてとなるパーマネント屋を開業した。新しい技術を次々と取り入れ、腕も確かなきみの店には、県内外から多くの女性客が訪れた。しかし、太平洋戦争が激しくなると、パーマは敵国の髪型であるとされ、きみは警察署に何度も呼び出され、パーマをやめるよう圧力を受けた。しかし、「女性が美しくなろうとする心まで失いたくない」という思いから、店を守り通した。

戦後間もなく、山野愛子が主催する全国美容コンクールが初めて開かれ、審査員を務めたきみは、美容界のリーダーの一人として一目置かれることになった。昭和24年（1949）、保健所から美容組合設立の依頼を受けたきみは、先頭に立って県内の美容師を調査し、その年に「富山県美容同業組合」を設立し、初代組合長に選ばれた。

昭和25年（1950）、美容師になるためには、美容学校等で国家資格を習得することが必要になった。しかし、地方の組合が美容学校を設立することは資金的に難しく、また、個人においても中央の美容学校に通うことは大きな負担であった。きみは、通信教育でも国家資格を習得できるようにと、当時の厚生大臣や地元出身の国会議員に強く陳情を続けた。昭和28年（1953）、きみの働きが実を結び、待ち望んだ法案が通過した。そのことをラジオで聴いたきみは、病身の直次郎と手を取り合い泣いて喜んだ。昭和32年（1957）、「富山県美容業環境衛生同業組合連合会」が設立され、きみは初代理事長となった。

60歳を前に、店を子らに任せ美容業を引退したきみは、富山市内の神通川河畔に料理旅館「神通荘」を開業した。生涯経営者兼女将を続けたきみは、平成3年（1991）9月2日、神通荘の一室で化粧をしていた最中に脳内出血で倒れ、2日後に息を引き取った。女性の美を追求し続け、富山県美容業界の発展に尽くした一生であった。享年89歳。

〈専門員 松田 啓宏〉



当時の田中美容院
(高岡店内の様子)

— 親族所蔵 —



昭和初期のパーマの様子

— 「目で見える戦争とくらし百科2」
2001年 日本図書センターより —